

臺灣の建築と工藝

藤島亥治郎

その昔、一時的に占據した西班牙、和蘭の文化は今や土に埋れ、埋れぬものも崩れ壞へて、こゝに説く範圍とはならない。しかし、今の臺灣には約四百萬の本島人と、約十四萬の高砂族と、二十數萬の内地人その他が強い亞熱帯の太陽の下で滴らんばかりの綠葉に包まれつゝ、それぞれに異つた、しかし風土的な特性から來る通性を以て、建築と工藝の文化を營みつゝある。それは、臺灣としての特種な文化であり、南方文化への一段階である。この意味に於て、今、臺灣の建築や工藝をその生活と結び合はせて考へることは意味がある。一ヶ月足らずの滞在の中の觀察で益もなからうが、敢えて何かと書き記したいと思ふ所以である。

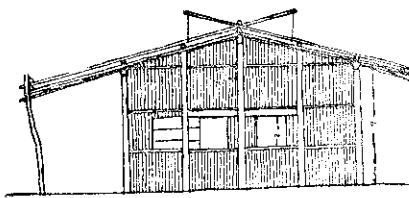
二

臺灣の原住民高砂族は直ちに比島の諸族につながる南方族であるから、その工作文化は特に南方への考慮の上に欠かすことができないが、しかし、種族も雑多であり、それに伴ひ且つ部落附近の風土や用材に應じて、その工作も多種多彩で、一言にして盡され難い。結局は山谷を跋渉して各蕃社を洩れなく調べた末でなければ綜括し

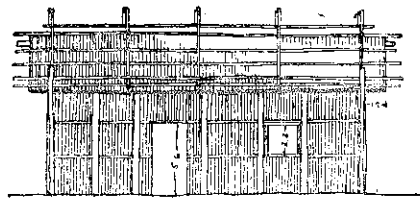
たことはいへないが、それについては、多年これに従事した在本島の建築家千々岩助太郎氏の貴重な報告がある。私としては僅に此地蠻タイヤル族の角板山社、ウライ社と、南地蕃のカピアン社、アプタン社との貧しい收穫を元として若干記すに止めたい。

原始的な民族の生活方式は類似の風土的條件の下では大體類似する。高砂族のそれが南方諸族のそれに近いのも當然ではある。

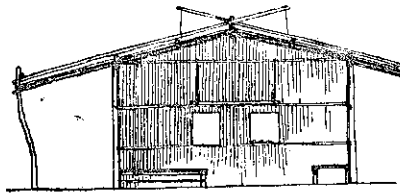
住宅の床の櫛へ方は高砂族の場合には多くはやゝ地盤面より低めた堅穴式か、又は、地盤面と同じ高さの土間で、南方に多い高床式は穀倉に汎用せられる他、例へば、タイヤル族マレツバ蕃社の未婚者の寢小屋その他の程度で、比較的に少い。それは、高床式にせねばならぬほどの暑さでもない、といふことではなく、高床を張り得るほどの工作能力がないといふことに由來する。事實、南方でも、例へば、カロリン群島の原住民の家は土間床が普通であり、偶々床を張つたものは文明族に教へられた結果である。同時に、堅穴式も俗に考へられてゐるやうに防寒のためではなくて、工作能力の不足から天井の高い家を造り難いので、天井高を少しでも高めよう爲に土間を低めた結果と見ねばならない。即ち、床の高さは殆ど寒暑に關係がないのである。



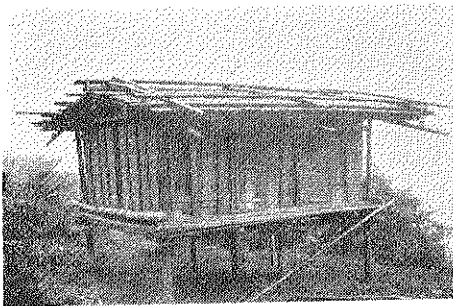
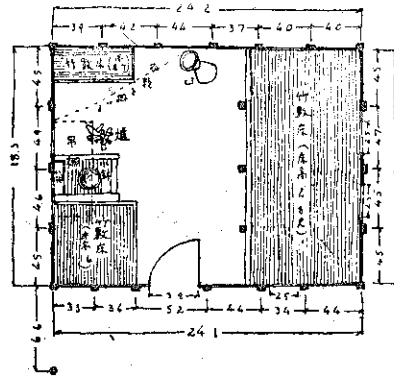
側面図



正面図



・タイヤル族ウライ社
頭目ユーミンアタイの家と
下はその穀倉

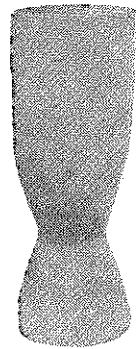


彼等は土間にべつたりと坐る。同時に、部屋の一隅に壁に沿つて床を設けて、そこに臥す。パイワン族のスレート造ではスレートで奥行一尺五寸、高さ一尺足らずの腰掛けを長々と設けて、それに腰掛けたり、頭をのせて寝をべつたりする。

附近から求め得られる材料を巧みに用ひて、建築もすれば家財道具一式をも作り上げるといふ未開族共通の生活方式は、彼等にも遺憾なく發揮せられてゐるが故に、彼等の工作文化は千差萬別である。竹、木、石材などあらゆるものを最も徹底して工作すれば、それが家となり、道具となる。

私の見たタイヤル族の角板山社やウライ社の家が徹底して竹造りであるのは特に興味を覚える。壁體は竹の半割を建仁寺垣のやうに組み合はせ、上下二本の横竹で押へて造り、緩勾配の屋根も同様に組み合せて、丁度、丸瓦と平瓦との關係のやうに並べて完全に雨を流し出す。それを横竹で押へ、その上に數箇所合掌竹を渡し、その先を交叉してチホとするさまは見事である。この竹の家を補力するものとしては、僅かに室の中央の數本の柱と、そして棟木と、數本の母屋桁よりない。

穀倉は太い木造床束の上に同様な



・第一圖

竹造をのせ、神社に見る
神庫のやうな氣高さも持
つ。

豚小屋の屋根は更に緩
く、殆ど陸屋根に近く、鶏小屋は全く陸屋根となる。畑地も低い竹
垣で圍ひ、竹樋で水を導く。

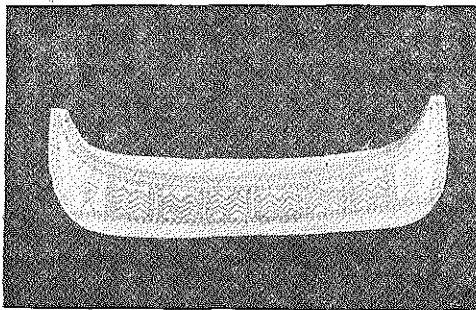
徹底した竹の工作と、その利用法は、竹の工藝に特殊な地位を占
める我々にも何等かを教へてくれる。

さうかと思ふと、同じく私の見たパイワン族のカピアン社やアブ
ダン社など、南大武山中の蕃社では、岩盤を構成する、人力を以て容
易に剥ぎ取り易いスレートですべてを仕上げる。木材としては室の
中央に立つ太い三本の柱と棟木と桁くらゐなもので、壁はスレート
を積み上げて厚くし、屋根もこ
れで葺いて緩勾配とする。家の
前の靈壇もこれで積み上げ道も、
これで舗装する。

但し、穀倉は木造である。太
い柱の上の枝股に桁を引掛け、
それを土臺にして籠狀に屋根下
地を編んで、その上を草葺とし
て結局は丸屋根に近い形とな
る。

以上は單に數箇の例に過ぎな

・第二圖



いが、各地の蕃社毎にその事情に應じた家の造りを考案する有様は
中々に面白いことである。

家具は勿論多くはないが、土間の一部に爐を切り、炊事場や物置
としたところに、桐製の臼、せいろ、柄杓、竹籠、布類が置かれ、
それらはすべて稚拙な工作に含蓄を持つ。幸にして私が手に入れた
せいろの表面に味はれる美しい曲線の如きは、轆轤仕上のやうな機
械工藝に決して味はれぬ、文明人の眞似し難いものである。このせ
いろは途中のくびれた所から上に餅米を入れ、下部を湯につけて、
下から煖めて蒸したり、又、酒を醸したりするに用ひる。(第一圖)

彫刻に特技のある紅頭嶼ヤミ族の舟の木彫(第二圖)や、パイワン
族の軒桁浮彫(圖鑒参照)の如きは、原始的な裝飾工藝の手法と、原
始宗教や族間傳承を語るものとして面白い。色彩が白と黒とのかつ
きりとした對比色の他に、好んで赤褐色を用ひるのは、後述する織
物の派手な赤色と共に原始人共通の好みである。

こゝに掲げた軒桁の浮彫はカピアン社テルー・ラムパウの家の
もので、この蕃社の他の例を壓して優れてゐる。時には鋸齒文を繞
らした細長い表面に、順序なく、横置倒置におかまひなしに、極め
て即興的に彫り埋められる。題材に彼等の畏敬する百步蛇、冠を被
つた神の姿、陰部を露骨に表現した男女、首狩の状、鹿の四肢を棒
に結へて二人して擔ぐ様、猪を負ふ様などで、殊に、鹿を擔ひ歸る
圖柄は趣に満ちた愛すべき作品である。色は白、黒、赤の他、緑を
も用ひてゐる。

掲出した織物はすべてタイヤル族角板山社の人たちが手織し、植

物性染料で染め上げたものである。縞物が多いが、経験に富む人はその中にも彼等の創作と、内地人の指導品とがあることを見分けられる。色は非常に鮮かである。腰布は冴へたピンク色、絆天は臘脂色と白、卓子掛は深赤色である。又、茶の柄柄の衣服地が多いが、その中に、細長い貝の輪切りを合せ縫ひつけた男の衣服地がある。重い布である。(圖録参照)

このやうにして、原始的な生活にも華やかな工藝的な文化に彼等は潤つてゐるのである。

三

本島人は二分して、閩族即ち福建系の約三百三十萬人と、粵族(越族)即ち廣東系約六十餘萬人とにする。従つて、その工作文化は南支系の臺灣への進出とせられようが、しかし、南支といつても、閩粵に相互に大いに相違する文化を持つてゐるので、本島でも共通性の多い中にも、割然として分れたところも多い。その大半は閩族であるから、所謂臺灣的なもの多くは福建系であるが、粵族の多い臺南その他南部地方には廣東系のもが見られる。その相違點を一言を以てすれば、福建系は華縵、廣東系は清楚といへよう。そして普通臺灣的と考へられるのは福建系である。(圖録参照)

その意匠的な特徴の著しいのは何といつても寺廟等宗教建築や城門などにあるとせねばならない。これらは同じ支那系でも北支や中支に見る支那建築とは變つた感じを受ける。即ち、福建系南支式であるからである。

裝飾過剰。それがその全般である。建物自身が天竺様系と見られる斗拱で深く突き出た軒を支へ、軒はその隅をぴんと反らせ、大棟は更に反り返つて海老の尾のやうに中空に跳ね上る。これですら奇怪至極であるのに、その上に隨所に、特に棟や軒先、斗拱まはり彫刻、繪畫、工藝のあらゆるものを背負つた上に、また背負ひ込んだやうな裝飾の過剰を呈するのである。桃色の壁には大きく牡丹などが描かれ、窓には緑青に幾何文の組子が嵌められ、斗拱間には花樹雲水の華麗な彫刻の間に神使のうそぶく有様が前方にまで乗り出して飾りつけられ、軒の裝飾亦同様、そして大棟には雲龍玉に戯れ足を擧げ尾をそばだて、天にうそぶくのを見る。目に見るものは彫刻が充満のみで、屋根の線が隠れてしまつたものもある。加へるに色彩の強烈にして幻惑的な、赤、桃、藍、青、綠、白、黑等濃厚なとり合はせて南方的な日光に映え、そして、眩ゆくきらめき、艶やかに光るのである。その奇怪なる形象と色彩の世界を以て觀者をして幻想の世界に陥し込む手際は實に不思議とせねばならぬ。これは嚴密な意味で建築ではあるまい。しかし、建築として一顧に値せぬとはいへない。宗教建築として人をそのやうに幻惑する使命を満したとも見える。南方人の好みだからとて認容もされてよいのである。

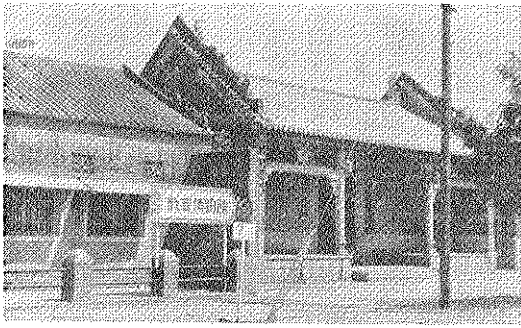
たゞ、これらの華美な裝飾を近づいて熟視したとき、その材料の粗末なのに驚くことである。特に、だまされたやうな感じを與へるのは陶器片を巧に飾りに用ひたことである。各種各色、無地、文様入りの嫌ひなしに、あらゆる陶器の破片を漆喰で練り固めた上に貼

りつければ、それが龍となり牡丹となる。陶器だから照り輝き、ぬるぬるとした觸感をすら感ずるのである。その手際の見事さは、寧ろ敬服に値する。北港の媽祖廟、天宮や基南の諸廟、臺北の龍山寺などその極端な例であらう。

ところが廣東系になるとこれに比べて清楚で、極めて建築的になる。その例は多くないが、臺南の兩廣會館や三山國王廟の如きは永く保存したいほどの優れた建築である。

廣東に行くと、この種のものが多いから、大して珍らしくもなささうだが、しかし、これほどのものは多くはあるまい。

兩廣會館を例にとる、緩勾配の切妻屋根には些の反りもない。棟も軒も直線である。そして、兩端には急傾斜の防火壁が三角形に峙つ



・兩 廣 會 館

様は大和の「うだつ造」さながらである。しかも棟や軒廻に少しほど平面的な彫刻がある他は飽くまでも簡素直截である。屋瓦は普通用ひられぬ深緑釉瓦で日を反射して燦めかしい。これは廣東省石灣製であるとか。これに對照して「うだつ壁」その他の軀壁は淡い水色に統一せられる。正面壇上の列柱は斗拱、彫飾と共に灰白色である。以上三色の他には雜色を多く混ぜず

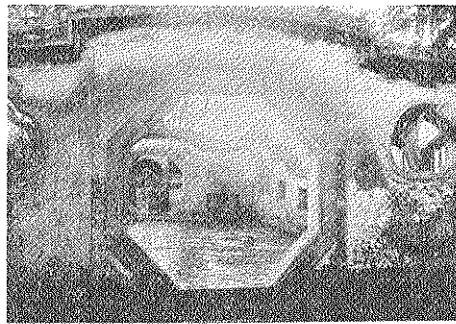
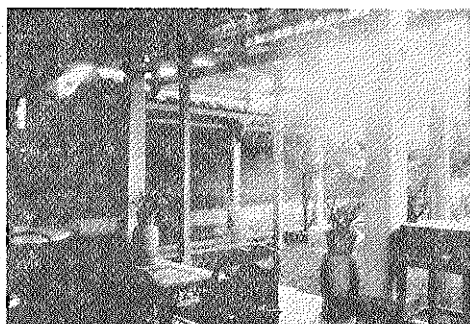
三色は奇しくも調和して典雅清純の趣致に成功したと共に、總じて引き締つて尖い感覺は恐ろしく現代的である。細部に亘つても同様である。例へば、石製列柱が細く、引き締つた線形のある様は印度教ドラヴィダ式を聯想せしめる。又、梁、桁、束等は廣東産の堅木を用ひ、相當複雑な彫刻も板を彫り窪める程度である。あるひは早くから廣東に渡つてゐた回教式手法の影響かも知れない。

以上の二様式のあることを、臺灣建築の意匠を論ずる上に忘れてはならない。同時に、南支系にも相互に懸隔の甚しい各種のあることを知り、今までの通説を是正せねばならぬ。たゞ、大半が福建系で、その意匠を簡略に城門の樓建築などに用ひ、更に、邸宅などに用ひるに止るのである。

本島人の生活から、信仰生活は度外視せられない。たゞし、宗教は、儒、佛、道の何れでもよい。何れにしろ、同様な信仰で同様な禮拜の仕方をする。殊に民俗間信仰として廟が多い。臺南の廟巡りだけでも數日を要する。分けても福建省の媽祖の信仰はこの地でも熱狂的である。その信仰に應じた儀飾や工藝にも力が注がれる。廟に獻せられる提灯を一つ求めた。「天上聖母」と朱書し太極や北斗星辰をあらはし、綠青、群青、燈、金等で彩る。しかし、北港朝天宮の大提灯に「本郷金助町〇〇商店製」とあつたから油断がならぬ。

濃厚な彫彩で些か飽滿の中にも、時には淡白簡雅な福建系もある。鹿港龍山寺の諸建築がそれである。年代も古いらしく、斗拱も健實であれば、珍らしく素木造であるのも清楚である。保存すべき

・林本源
邸の壁
と月
窓(右)
と林猷
道邸



ものである。

澎湖島は風光美はしく、建築も龍宮のやうに幻惑的で、明るく、そして、愛らしい。海邊に龍舌蘭の茂みの向ふに、桃色の壁、褐色の屋根が、軒廻りの藍緑と映發して、小ぢんまりと整つた觀音亭は全く龍宮のそれかと怪しまれた。文石書院亦同様。たしかにこの島の建築に特殊で、藝術味が豊かである。

その特殊性は民家にも見られる。すべて小作りであるが、切妻の頂部の意匠が、本島では一律であるのが、この島では變化に富む。又、暖い桃色の壁間や棟の上に横に並べて飾られた小型の透彫壽字文靱(圖鑑参照)が紅、緑、黄、コバルト、白等の淡い、明るい色取り取りのものを交せてゐるのは、實に鮮やかに印象的である。これは本島の

家に殆ど見られぬ美極致である。もつともこれらは福建省から買はれて來たので、今では新しく來ることなく、失はれる一方である。

本島人の住生活は富貴の極から貧賤の極まで幾段階もあり、その上、北、中、南部により、又、都市と村落により、異り、一概に述べられない。

富家といへば、先づ、福建省から古く淡水に定着し、富を増して奥地に入つた林家一族が數へられよう。とり分け、臺北近郊の林本源邸が、堂々と屋を列ねた建築と、數奇の限りを盡した庭園とで誰知らぬ者なく著名であるが、又、臺中近郊霧峰の林猷道邸、同林氏の茶園、花園、臺中の吳鸞旂邸、新竹の林占梅故宅潛園、季濟臣別墅適園、鄭氏の北郭園等、何れ劣らぬ邸宅振りである。ことに林猷道邸の正廳が柱を簇立させたヴェランダをそなへ、奥深い邸内には王者をも凌ぐ戲臺を構へ、又、花園は宏大な洋式庭園で、莊嚴な墓域をも具へるなど、地方の名門の繁榮眼を驚かすばかりである。

その一方、中下流の住宅がそれぞれの身分に應じて屋敷構をす。總じて北臺灣の家は飾つた富裕さを示すが、臺中に来ると、土角造(日於陳瓦造)を白く塗り、草葺とした、小ぎつぱりとした農家となり、更に南化して彰化あたりに来ると竹の網代壁が見え出し、臺南以南の南部臺灣に來ると、全く竹の柱、竹の編壁に草葺根となり、南端鸞鼻に至つては竹壁又は亂石積の壁に竹葺又は草葺の家となつて、殆ど高砂族のそれとも甚しく懸隔せず、著しく南方的となり、南方への足場をよく談るのである。

四

このやうに原住及び古く渡來した人々が、その風土と民性とに合せて、それぞれの家と工藝とを造つて來た。そして、それに交つて内地人の經營も始つて既に五十年である。自ら風土的な解決も遂げ、在住の氣分は悪くないやうだ。又、都市、街路の様も内地に見

られぬほどに整然として美しい。又、本島人の工藝や、殊に高砂族の工藝を指導して、新しい好い感覺のものも作りつゝあるのは慶すべきである。それが更に南方の諸地域への工作文化指導への好い試金石であることを自覺して、彼の地の人たちが私たちと共に愈々勵むべきである。

(筆者は東大工學部教授)

■臺灣の造形文化運動■

時代の要請に應へて南進基地臺灣にも新たに生活に即した造形文化運動が生れ、去る五月三十一日臺灣生活文化振興會の結成を見るに至つた。

同會は臺灣總督府文教局長西村高兄氏を會長とし島内在住の美術家、工藝家、建築家を初め官民の有力者を集めて結成されたものであり、これに先立ち内地の關係方面と連絡をとるため特に理事顏水龍氏が上京され、主として商工省工藝指導所、興亞造形文化聯盟との連繫を圖つた。

此の結果、近く此の兩機關より關係者が渡臺して臺灣、内地間の工藝的、産業的交流に努めることゝなつた。

以下、臺灣總督府文教局社會課より提供された資料により、臺灣生活文化振興會の概要を報告しておく。

造形文化の振興へ

歐米の流行に追従した纖弱無味なる現代日本の生活文化にわが國民の將來を托すことは極めて危険な事であり、殊に今日の決戰體制下に於てその弊は痛感される。これを是正し東亞独自の健全にして滋味ある生活文化を興隆せしめて國民の日常生活に力と潤ひを興ふることは國家百年の計であると共に刻下の急務であるに鑑み生活に即したる造形文化の振興を圖り兼ねて、民間藝術の醇化向上に資する目的を以て設立された臺灣生活文化振興會創立總會は三十一日正午より島都教育會館に於て西村文教局長、慶谷鐵道部總務課長、金關臺大教授、鹽月壹伯、大倉府營總課長、加藤技師、林皇奉本部文化部長等關係者二十餘名出席、まづ西村文教局長が創立經過を述

べて挨拶にかへ、次いで金關教授が設立趣旨を詳細説明してのち規約審議に移り、役員選任に入つたが會長に西村文教局長がなり、西村會長より夫々理事幹事を委嘱して午後二時閉會した。因みに同會の事業は研究調査、指導獎勵、展覽會、講演會、座談會等いろいろ計畫してあるが、差し當り本年十一月頃臺北市を振り出しに生活工藝展を開催することゝなつてゐる。(臺北興南新聞六月一日朝刊掲載)

設立趣意書

日本近代に於ける歐米文化の移入に際し科學的技術や思想の方面は固より文藝美術の如き純粹藝術の面に於ては少くとも一應の批判を経て攝取されてをり、また絶えず批判檢討を蒙つてゐる。然るに之等の部門に比較して國民の日常生活により直接的である生活造形文化の方面に於ては、單なる利潤のみを目標として歐米の流行に追従し、或は歐米人の歡心を迎へんとするに汲々たる資本工藝家の意圖に專斷